

ヴァイマル末期ドイツ共産党の党内事情 —「ノイマン・グループ」の評価をめぐって—

星 乃 治 彦

はじめに

1. 表層の路線問題
2. 1932年2月 KPD 中央委員会総会
3. 大統領選挙
4. 裏の党内対立
5. 「ノイマン・グループの敗北」

おわりに

はじめに

本稿では、1990年以後開かれた旧東ドイツの文書館史料を使いながら、ヴァイマル共和制末期におけるドイツ共産党（KPD）の党内対立の構造を明らかにし、党内意思形成のメカニズムを解明することを目的とした。

「冷戦」時代の Kommunismus 研究は、イデオロギー過多な一方で、史料の公開が遅れていたことによって、客観的な歴史叙述が極めて難しかった分野の一つだった。その中でも、KPD の党内事情を知ろうとすれば、わずかな指導部の言動の変位を見逃さないなど、細心の注意が要求される困難な作業を覚悟しなければならなかった。そうした中でヴェーバーが西側におけるほとんど唯一まとまった KPD の党内事情研究を発表していた⁽¹⁾。ヴェーバーは、1919年 KPD が生まれてからの党内対立を、「相対的安定期」を中心に明らかにしている。そこでは、「右派」、「左派」、「調停派」といった KPD 内の路線対立の結果成立したのは、党議長テールマン指導部を中心とした一枚岩的構造とモスクワへの従属であった、とする。ヴェーバーは、1981年にヴァイマル末期にもその図式を適用して、KPD 党内の『回状』を中心に史料集を編纂しているが、これは、89年以前の西側における史料収集の頂点を成すものと評価できよう⁽²⁾。そこではヴァイマル末期の路線対立

は、党議長テールマン指導部と、それに反対する「極左派」の政治局員ノイマンをはじめとするグループの対立ととらえられる。たしかに、1989年までの刊行史料を中心にした研究ではこれが限界であった。というのも、路線対立とは違った次元の対立があることがそこでは当然ながら気づかれなからであった。

これに対する冷戦時代の東側の代表的研究はテールマンの『伝記』だが、ヴァイマル末期の部分はヴィンマーが執筆している⁽³⁾。東ドイツ政権党の党史という性格から、官製の色彩が強く、問題意識がテールマン指導部の正統性の強調にあった。テールマン指導部とノイマン・グループという対立を認めるものの、「誤り」の責任を一方的にノイマン・グループに負わせているなど、客観的叙述というには難がある。ただ『伝記』は、「89年」以前の研究にあっては、ほとんど唯一ドイツ社会主義統一党（SED）中央党文書館の史料を駆使するなど史料レベルでは最高峰にあったし、その後文書館史料の跡付け作業をやってみると、史料の捏造などは見受けられず、最低限の学問的体裁は保たれている。したがって、そこから発掘される史実の正当な位置付けが必要とされている。

こうした89年以前の研究では、その評価の違いにもかかわらず、テールマン対ノイマン・グループという路線上の対立構造として描く図式は東西ドイツで共有されていたといえる。ただ、ノイマン・グループの責任とされる項目を検討すると、それが一つのグループが路線として打ち出したにしては矛盾するものが多い。例えば、「右翼日和見主義的偏向」も「左翼冒険主義的傾向」も同時にノイマン・グループの責任にされているのである。むしろこの点では、単純な微妙な変位を追い、党内模様を明らかにしようとした日本の研究者の業績は評価されても良い⁽⁴⁾。ただそれでも、ノイマン・グループとは果たして何だったのかという命題は、依然として謎のままである。

その後この分野の桎梏となっていたイデオロギー過多と史料の限定性という問題は、1989年の米ソ対立の溶解とともに劇的に解決した。草刈場と化した政権党の文書館を使った研究は、KPDの社会史的考察を中心に急速に進展している⁽⁵⁾。その代表たるマルマンは、地域史の蓄積と「冷戦」的発想の払拭によって、優れたKPD研究を世に問うている⁽⁶⁾。ただ、そこでもKPDの党内事情には触れられないままに終わっている。

新しい史料状況の下でこの問題を扱っているのは、わずかにキンナーの研究のみである。そこでのキンナーの「ドイツ社会主義統一党（SED）の歴史叙述においては、エルンスト・テールマンの方針とハインツ・ノイマンの

路線の間にあった際立った対立を強調していた一方で、……西側の研究はKPDがモスクワによって外からコントロールされていたということを強調する⁽⁷⁾といった指摘は適切である。ただ、キンナーの叙述自体は端緒的に終わっている。こうした史料の開放にもかかわらず研究が期待されるほど進捗していない状況は、89年以降政治史的関心自体がむしろ後退してしまったという背景が生み出しているものであろう。したがってテールマンとノイマンという対立構造の検討は残されたままである。そこでここで課題として浮上してくるのは、開かれた文書史料を駆使しながら、テールマン対ノイマンと捉える従来の図式を再検討することにある。

ここでは観測地点として、32年春の大統領選挙前後の時期をとりあげよう。というのも、この期、KPDの表向きの政治方針が32年春の「反ファッシュヨ行動(Antifaschistische Aktion)」という、後の人民戦線運動のはしりに転換する直前の時期に当たる一方、党内にあってはノイマン・グループの「敗北」が鮮明になる時期とされるからである⁽⁸⁾。したがって、この時期を考察することを通じて、KPDの路線問題とノイマン・グループの相関がある程度明らかにできることが期待される⁽⁹⁾。

- (1) Weber, Hermann, *Die Wandlung des deutschen Kommunismus, Die Stalinisierung der KPD in der Weimarer Republik*, 2 Bde., Frankfurt/M.. 1969. これを基に特に「調停派」の動きに着目した伊集院氏の論稿がある。伊集院立「相対的安定期のドイツ共産党党内論争」『階級闘争の歴史と理論 3』青木書店1980年92-124頁。
- (2) Weber, Hermann, *Die Generallinie, Rundschreiben der Zentralkomitees der KPD an die Bezirke 1929-1933*, Einleitung VII-CXI, Düsseldorf 1981 = *Hauptfeind-Sozialdemokratie, Strategie und Taktik der KPD 1929-33*, Düsseldorf 1982.
- (3) Ernst Thälmann, *Eine Bibliographie*. Berlin 1979.
- (4) 例えば、富永幸生・鹿毛達雄・下村由一・西川正雄『ファシズムとコミンテルン』東大出版会1978年、200頁。石川捷治「ドイツの危機—労働者運動の自己崩壊とファッシュ化」中河原徳仁編『1930年代危機の国際比較』法律文化社 1986年。斎藤哲『社会ファシズム論』とその修正(2)』『政経論叢(明治大学政治経済研究所)』50-3/4(1981年3月)177-188頁。拙稿「ヒトラー前夜におけるドイツ人民戦線構想の萌芽」『西洋史学論集』第23輯(1985年12月)35-47頁。
- (5) 「1989年」以降のコミンテルン関係の文書館の状況については、シュトゥーダーが1996年9月のリンツ会議で報告し、その後その趣旨を『労働運動史紀要』誌に掲載している。Die Rückkehr der Geschichte: Das Bild der Komintern nach

- Öffnung der Archive, *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung* (=BzG), Jg. 39 (1996) - 2, S. 15 - 29. 日本では、とくに東ドイツの文書館については、「東部ドイツの文書館」『総合科学 (熊本学園大学)』3-2 (1997年) 107-125頁を参照。同時にこれまで一般に使用されてきた「反ファシズム」などの概念の再検討も始まっている。Erlinghagen, Robert, *Die Diskussion um den Begriff des Antifaschismus seit 1989/90*. Berlin/ Hamburg 1997.
- (6) Mallmann, Klaus-Michael, *Kommunisten in der Weimarer Republik, Sozialgeschichte einer revolutionären Bewegung*, Darmstadt 1996; ders., Milieu, Radikalismus und lokale Gesellschaft, Zur Sozialgeschichte des Kommunismus in der Weimarer Republik, in: *Geschichte und Gesellschaft* 21 (1995), S. 5-31.
- (7) Kinner, Klaus, *Der deutsche Kommunismus, Selbstverständnis und Realität, Bd.1 Weimarer Zeit*, Berlin 1999, S.188.
- (8) 石川捷治「1932年の反ナチ統一戦線問題」『法政研究 (九大法学会)』45-2 (1979年) 65-111頁。
- (9) ここで主に使用する史料は、1992年に私がベルリンの旧 SED 党文書館で収集したものである。当時モスクワから返還されたばかりのコミンテルン側史料をはじめ、その後一部規制されることになる史料も、この時はほとんどすべて閲覧できていた。その後ドイツ統一に伴い、文書館自身の管轄や名称が変わるなど、状況は大きく変化しているが、ここでは収集当時の文書館名ないし史料番号を付すことにした。

1. KPD の「苦悩」

1931年当時のブリューニング政府は、議会内に多数派を形成できない、大統領の信任のみに基礎を置く「大統領政府」であり、それをドイツ社会民主党 (SPD) が実質上の閣外協力である「許容政策」によって支えていた。SPD はブリューニング政府をナチスよりは「より小さな害悪」と見なしていたからである。その一方でナチスの脅威が現実のものとなって久しかった。

「今二つの可能性がある。ブリューニングがその背後にいる金融資本に完全に降伏し、ドイツを結局フランス的ヴェルサイユ体制に組み込んでいくのか。・・・二つ目の可能性はシュトレゼマン的外交政策の最後の残滓を取り除き、『民族右翼』が政権に近づくか、ないしは直接入閣するかである。・・・経済状況と外交政策から内政を見れば、第1の道ではなく、第2の道を進むだろうと私は確信する」とノイマンなどは予測していた⁽¹⁾。実際に31年10月9日のブリューニング内閣が改造され、同じ10月11日から12日にかけて右翼勢力が大結集した「ハルツブルク戦線」が結成されるなど、ドイツは確実に「第2の道」に突き進んで行った⁽²⁾。

たしかにこの期、KPDは基本方針として「社会ファシズム」論をとって
いたものの、このナチの躍進に相当な脅威を感じていたのもたしかである。
1931年11月14日ピークからKPD中央委員会書記局に宛てられた手紙でも、
「党は最近ナチのうねりは止まったという見解をとっている。だが、事実は
逆のことをしめしている。ナチはすでに百万の黨員を擁しているとハインツ
(・ノイマン—星乃)は語っている」と書かれていた⁽³⁾。こうした危機感
は下部組織に行けば行くだけ強くなっていった。例えば、31年12月27日付け
のピークのテールマン宛書簡の中では、次のように言われる。

「討論の中で強調されたことは、現在右翼日和見主義の危険が非常に強く
示されていることである。ヴェルテンベルクのいくつかの地域では党組織の
解体にまで至り、社会民主党の統一戦線マヌーバーの前に完全に屈服してい
るところもあるくらいである。われわれの統一戦線運動においては多くの地
域でSPDとナチスに対する正しい立場がとられていない。10のベルリン下
級地区会議においては、そこで採択された決議の中ではナチスにだけ反対す
る色合いだけで占められ、社会民主党に対して主要打撃を向けねばならない
ということは全く触れられていない。」⁽⁴⁾

ほとんど「社会ファシズム」論という当時の中央の方針を無視しているか
のようなこうした地方組織の状況は、マルマンが「一枚岩的、一元的に規定
されたシステムとして共産主義を説明することは、自分自身の判断基準にし
たがってKPDの地域組織がその地域の政治を作り出していたことや、もし
それを誤りだと地域が判断すると上からの指令さえ無視していたことを見す
ごす」⁽⁵⁾と指摘したことをまさに実証しているのであった⁽⁶⁾。とくに、社
共の対立が激しかったベルリンを離れると、そこでは、ナチの危険性の方が
日増しに実感されていて、主要打撃をSPDに、といういわゆる「社会ファ
シズム」論と呼ばれるKPD指導部の主張は、下部においてはうつろに聞こ
えるようになった。

こうしたナチへの危機感を無視できないKPDは、1930年春以降、ナチ分
析を進めて、ナチの土壌とKPDが見なした中間層獲得重視路線を顕著に追
求することになる。その成果が30年8月24日に発表された『ドイツ国民の民
族的・社会的解放のための綱領宣言』や30年末から展開された「人民革命」
構想、さらには31年5月の農民救済綱領であった⁽⁷⁾。

こうしたKPD独自の経験の蓄積は、一枚岩的とされていた当時の国際共
産主義運動の構造に微妙な変化をもたらした。実際31年11月20日に、スター
リンは『スターリン書簡』を発表し社会民主主義攻撃を強めはじめるのと前

後して、⁽⁸⁾ テールマンも KPD 党機関誌『インテルナツィオナーレ』に「わが党の理論的・実践的活動における若干の誤りとその克服への道」を発表し「イデオロギー的攻勢」を訴えているのだが⁽⁹⁾、それでも『スターリン書簡』に比べればテールマンの社会民主主義批判はそれほど強くない。むしろ、テールマン論文は様々な KPD 自身の問題を指摘しており、「党内の動揺と混迷を如実に物語る」「KPD の苦悩の記録」とこれを特徴付ける下村の指摘が的確だと考えられる⁽¹⁰⁾。さらに、「これまで党からの希望で距離が置かれていたが、これからコミンテルンは KPD が抱える右翼日和見主義の危険に対して公然たる立場をとることが義務付けられる」⁽¹¹⁾ といった 31 年末のコミンテルン側からテールマンに宛てられた手紙を読めば、KPD は自分の意思で「右翼日和見主義」批判を差し控えさせていたという興味深い事実にも遭遇することになる。

ここでいう「右翼日和見主義」とは、SPD やこの期後の人民戦線に到達する認識をもっていながらカー・ペー・ヌル (KPO) と嘲笑されていたブランドラーら右派共産主義者たち、さらにはドイツ社会主義労働者党 (SAPD) に結集する左翼社会民主主義者たちとの共闘に進むことであった⁽¹²⁾。だが、「KPD と SPD、SAPD とブランドラーたちとの共同集会は考えられないし、あってはならない。だが、残念ながら実際にはそうした例がドイツ中のいたるところで行われているのである」⁽¹³⁾ という記述を見れば、「右翼日和見主義」は、かなりの広がりをもっていたと予想される。こうした中央の方針がなかなか下部に受け入れられない「苦悩」の中で KPD は、1931 年 5 月 15 日の総会以来 9 ヶ月ぶりの中央委員会総会 1932 年 2 月 20 日から 23 日の 4 日間にわたって開催することになった。

- (1) Aus einem Brief vom Heinz Neumann an Leo Flieg vom 25. 5. 1931, Institut für Geschichte der Arbeiterbewegung (IfGA), Zentrales Parteiarchiv der PDS (ZPA) I 6 (Kommunistische Internationale, Exekutivkomitee-Vertretung der KPD, Sekretariat) /10/83, Bl.120.
- (2) ヴァイガルトナーによれば、1931 年末までソ連は、「ヴェルサイユ体制打倒」を前面に掲げたナチスによって、対仏友好政策を基調とし「履行政策」に傾斜するブリュニングとそれを支える SPD を牽制することを考えていた。Weingartner, Thomas, *Stalin und der Aufstieg Hitlers*, Berlin, 1970, S.98-138.
- (3) Betr. Einschätzung der nationalsozialistischen Bewegung und der faschistischen Gefahr, den 14. 11. 1931, IfGA, ZPA I 6/3/219 (Pieck) Bl.114.
- (4) Brief an Thälmann vom 27. 12. 1931, IfGA, ZPA I 6/3/219, Bl.140.

- (5) Mallmann, Milieu, S. 5-6.
- (6) 政党間対立にもかかわらず、下部の社共労働者の間で共闘が進展していたことについて、マルマンは労働運動の伝統や人的紐帯の強さをはじめとして、マルクス主義という世界観に基づく階級闘争によって社会主義を達成するという目標、集団を主体とする発想、「救済」イメージを伴った擬似宗教的要素、進歩に対する楽観主義、権力の変化への期待、理性信仰、「進歩の旗手」、「階級の前衛」という自己規定、「プロレタリアート」の神秘化、歌われる歌、シンボルとしての赤旗、「同志 (Genosse)」という言葉、メーデーという共通の祭典、といった共通の土壌を強調して、対立を相対化する。Mallmann, Milieu, S.14.
- (7) 拙稿「ヴァイマル共和国末期における反ファシズム運動の諸相」『歴史評論』373号 (1981年6月) 97-115頁。
- (8) Fragen der Geschichte des Bolschewismus, in: *Internationale Presse Korrespondenz (Inprekorr)* Nr. 110 vom 20. Nov.1931, S.2485 ff.
- (9) Thälmann, Ernst, Einige Fehler in unserer theoretischen und praktischen Arbeit und der Weg zu ihrer Überwindung, in: *Die Internationale*, XIX (1931) - 11/12, S. 481-509.
- (10) 『ファシズムとコミンテルン』200頁。
- (11) Brief an Thalmann vom 27.12.1931, IfGA, ZPA I 6/3/219, Bl.140.
- (12) 拙稿「反ファシズム運動の模索」『西洋史学』(日本西洋史学会) 142号 (1986年9月) 20-34頁。
- (13) Protokoll-Manuskript der Sitzung des Zentralkomitees der KPD vom 20.-23.Feb. 1932. 1. Verhandlungstag 20. Feb., IfGA, ZPA I 2 (ZK der KPD)/1/82 Bl. 216. ただ、KPDにしても「右翼日和見主義」というレッテルは貼りつつも、例えば、SPD指導者の一人ブライトシャイトがダルムシュタットで社共の統一戦線を提唱したとき、11月24日朝10時半にピークがフリークと電話連絡した時も話題に上っていたように、それは常に気になる存在でありつづけた。Telefongespräch Pieck mit Flieg am 24. 11. morgens 10 1/2 betreffend Darmstädter Rede: Breitscheids über Einheitsfront der SPD mit KPD gegen Faschismus, IfGA, ZPA I 6/3/219, Bl.123.

2. 1932年2月KPD中央委員会総会

この2月総会でも相変わらず、「ブライトシャイトのダルムシュタット演説の中に出てきたような『統一戦線』提案のようなマヌーバー」、「『鉄戦線』の問題はマヌーバー」、といった発言がされている。その限りでは、党指導部に統一戦線の発想を見出すのは難しい⁽¹⁾。こうした統一戦線型の主体形成という道を辿ることを拒否したKPD指導部は、ではいったいどういった主体形成をイメージしていたのだろうか。

ハンブルク出身でテールマンに近かったシューベルトは、テールマンの2月総会での演説を聞いた後で、彼の演説の趣旨を「一年前の中央委員会1月総会の際に状況の正確な分析に応じて、戦略的主要課題として人民革命の準備を立てた。それから1年たった今日、我らは、プロレタリア革命の闘争のために労働者階級の多数派の獲得を主要課題としてたてる」⁽²⁾とまとめている。これをみると、32年2月総会の時点でKPDは、31年を中心に進められてきていた中間層獲得重視の政策さえ変更して、労働者獲得路線にスイッチしようとしていることがわかる。テールマンは高らかにこの場で新しい路線を次のように定式化した。

「これから私の報告の本題に入ろう。革命的大衆闘争の問題、ストライキ指導・経営活動・RGO活動とプロレタリア統一戦線の問題がそれである。ここでの戦略的スローガンは、政治権力をめぐる闘争勝利のためにプロレタリアートの多数を獲得することである。」⁽³⁾

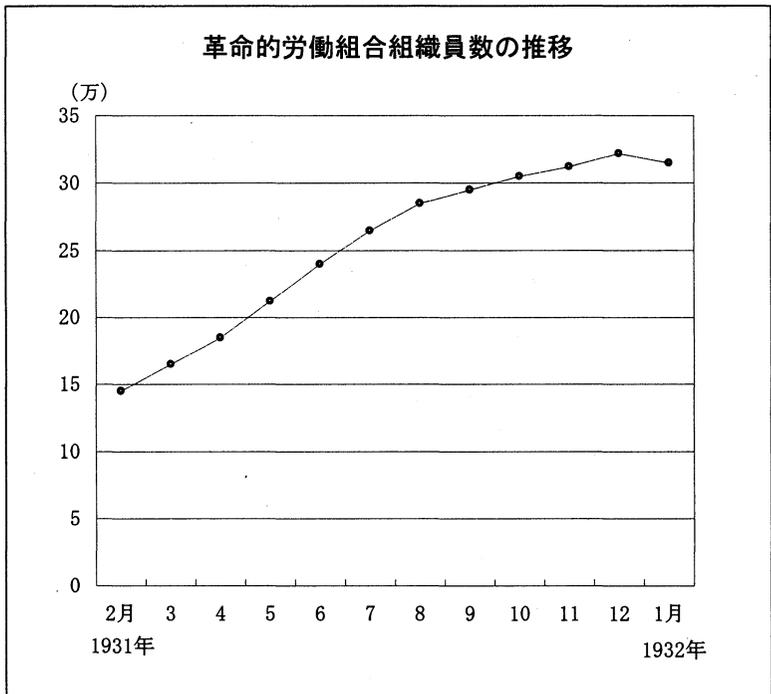
たしかに、31年12月9日に発せられた「経済・金融の安定化と国内秩序の確保のための第4回大統領緊急令」では、企業家へは税の軽減措置がとられる一方で、労働者に対しては、賃金の10-15%カット、公務員の場合はさらに9%カット、社会保障費の削減等の措置がとられ、労働者の不満は高まっていたと考えられる。ただ、そうした不満がKPDに有利にはたらくというのは、いささか短絡的であった。

例えば、ヴァイマル時代末期の共産党は、伝統的にSPDの影響力の下にあった労働組合から独立し革命的労働組合反対派(RGO)という独自の労働組合を作ろうとしており、これを「労働者階級の多数派獲得」の梃子と見なしていた。だが、その勢力はKPD自身の統計資料によってさえ表のようであった。1932年段階でSPD系労働組合は353万人を擁していたのに対して、RGOは精々25万人あまりにとどまり、それも32年には頭打ち傾向にあったのであった(グラフ参照)。KPDの党組織にしても、史料が手もとにあるシュレーゼン地域の場合、表に見るように、経営内では停滞が顕著であるし、KPDの伸張の源泉はむしろ経営外と農村にあったのであった。

表 シュレージエン地域の KPD 細胞数

	1930年 5月	1932年12月
経営細胞 (Betriebszelle)	35	36
居住細胞 (Ortszelle)	102	245
街頭細胞 (Stra.Bezelle)	96	190
拠点細胞 (Stützpunkt)	6	228
農場細胞 (Gutzelle)		12
農村細胞 (Dorfzelle)		86

: Bericht der Bezirksleitung Schlesien am 17. Parteitag der KPD am 3. u. 4. Dez.1932, o.O., o.J., S.22.



: Die organisatorische Entwicklung der Partei im Jahre 1931 vom 20. Feb. 1932, NSDAP Hauptarchiv, Hoover Institution, Reel 41, Folder 810.

さらにこうした KPD の就業労働者獲得の限界性は斎藤によっても指摘されている。それによれば、労働者とりわけ女性労働者の間で KPD に対する不安や恐怖が極めて強く、とくに解雇を恐れて、KPD のピラを受け取ったり、集会に参加することはおろか、同僚としての挨拶さえしない場合もあった。「共産党は弱すぎて、賃金カットに対するストライキを一度も実行できないし、経営内での経営者の攻撃も無にすることもできない」というような声もあったとされる⁽⁴⁾。このように結果的に見て、「労働者の多数派獲得」路線は様々な壁にぶつかり、めばしい成果を生み出すことはできなかった。

当然 2 月総会でも「どうして我々にとって都合のよい状況にドイツはあるのに、また企業家からの攻撃は強まり、経営における大衆の急進化は進み、党の影響力も増しているというのに、大規模なストライキがないのか。またなぜストはそんなに短期間なのか」⁽⁵⁾と述べたニーダーライン出身の中央委員シュルツのように頭を抱えた発言が相次いだ。とくに経営活動の遅れを嘆く報告が 2 月総会では多い。テールマン自身、「我々はあまり多くの経験をもっているわけではない」⁽⁶⁾と認めているくらいである。テールマンが「輝かしき事例」として例外扱いしているのはブラウンシュヴァイクの例くらいである。これは、10月18日のナチの労働者街襲撃を契機に、政治的大衆ストライキが生起し、KPD の勢力拡大の梃子になった事件であった⁽⁷⁾。

ただ、「ブラウンシュヴァイクでそうであったようにファシストの襲撃や他のきっかけとなるような事件と絡ませれば、我々は赤色大衆自警団をもちろん最も首尾よく作り出すことができる。それに、我々は経営で、失業保険支払い所で、住居地区において反ファッシュの防衛リストをもっている。そのリストにはとてつもない数の労働者とくに無党派や社会民主党の労働者たちが署名しているのである」⁽⁸⁾と、このブラウンシュヴァイクの「輝かしき例」でさえ、ナチの襲撃に対する激昂が反ナチ運動のモチベーションになっていることに注目したい。逆に通常の状態では、「経営にいる労働者大衆をもっとも基本的な生活要求と経営労働者の要求のために動員する中で、市町村の労働者ストを成功裡に遂行するというこれといった事実はなかった」とテールマンが言うほどであった⁽⁹⁾。

むしろ、新たな主体形成という点で注目すべきは、ルール地方の代表が、「自衛団は決定的な役割を果たしている。・・・我々は自衛団の問題を解決し、この重要な統一戦線機関を作り出していくという目標を掲げている」⁽¹⁰⁾と発言しているように、自警団結成の動きであった。これについては、

ベルリンの代表であったクンツも「現在我々は新しい自律的大衆運動の新しい現象形態を経験している。数千の労働者を新しい編隊に結集させることができるこのいわゆる自警団は、国民社会主義者たちからの襲撃に反対する闘争の中で、労働者の生活を守り、すでにブルジョアジーの攻撃に対して労働者の利害を守っている」⁽¹¹⁾と評価するものであったし、「労働者たちは、反ファッション運動にナチの襲撃に反対する防衛の意志からやってきた。我らの任務はこの観点から労働者をより高度の水準に引き上げることである」⁽¹²⁾という認識はKPD内になかったわけではない。

さらに32年夏以降重要な役割を果たすようになる統一会議運動についても、もうこの時点でバーデンの代表ドルの次の発言のように登場してきている。

「我らはちょっと前にバーデンにおいて代表者派遣の数の多さが示す大規模な統一会議をとり行なったばかりである。バーデンにおける社会民主党の内相マイヤーが前日になって会議開催を禁止したにもかかわらずである。」⁽¹³⁾ただ、そこで「だれがその際指導権をもってるんだ」という野次が飛んでいるように、この時点では下からの統一戦線といっても、少なくとも表向きはKPDの指導性を要求する声は大きかった。

このように、全体としては、2月総会において、たしかに後に32年5月以降統一行動の中心となっていく自警団と統一会議といった新しい主体については言及はあったものの、それは萌芽的であるし、党指導部によって明確には位置付けられなかった。したがって、旧東ドイツの研究者たちが言っていたような、統一行動への「転換」とは言えるようなものでは2月総会はなかった。むしろ、主体形成という点について2月総会は、「労働者階級の多数派獲得」という展望なき戦術を一応はとることになったのである。

また、旧来の東ドイツの記述によれば、2月総会の場合は「ノイマン派のイデオロギー的敗北」⁽¹⁴⁾ということになっているが、こうした2月総会という表の場で テールマンとノイマンとの対立を発見することは困難である。ノイマンの行動はこの場では表面上何ら問題ないように見える。ただ、平静が保たれていたような2月総会についても、さらに史料を読み進めると、この場のテールマンの報告だけで1日半にも及んでいたことがわかる。それは、ミュンツェンベルグが休憩の合間に「95（テールマンのこと一星乃）同志の演説が1日半もかかるなど聞いたことがない。何ヶ月も我らは会せず中央委員会がそんな演説のために他のことができないといったことも聞いたことがない」⁽¹⁵⁾と、とりとめもないテールマンの演説に不満をもらしたとされるくらいであった。それに内容的にも「テールマンの結語はそれはひどいもの

であって、もし他の誰かそうした演説をしようものならば、殴りかかられていただろう⁽¹⁶⁾といわれるようなものであった。こうした事態はたしかにテールマンの指導力に疑問を感じさせるものである。事実、テールマン自身、「指導部の状況は非常に先鋭化してきている。最近の中央委員会総会は新たな傷口を開いてしまい、中央委員には今まで隠されていたことの多くのことがこれみよがしに明らかになってしまった」と言っているほどであった⁽¹⁷⁾。

だが、そもそも2月総会の場合はKPDにとって重要な場であった。「この同志たちは、プロイセン邦議会議員団、国会議員団と現状を協議し、目の前に迫った選挙つまり、大統領選挙とプロイセン選挙に決意を固めるために一同に会しているのである」⁽¹⁸⁾といった性格をもち、国会議事堂で開かれ、異例に国会議員やプロイセン州議会の代表も加わっていたし、来賓としてフランス共産党から後のフランス人民戦線の旗手となるモーレス・トレーズまで参加していた⁽¹⁹⁾。つまり、党が一丸となって、来るべき大統領選やプロイセンの州議会選挙等に臨む決意を確認した場であった。ところが、その選挙でKPDは思うような結果が得られなかったのである。

- (1) Protokoll - Manuskript der Sitzung des Zentralkomitees der KPD vom 20. - 23. Feb. 1932. 1. Verhandlungstag 20. Feb. (Protokoll - Manuskript I), IfGA, ZPA I 2/1/82 Bl.138, 140.
- (2) Protokoll - Manuskript der Sitzung des Zentralkomitees der KPD vom 20. - 23. Feb. 1932. 1. Verhandlungstag 20. Feb. (Protokoll - Manuskript II) IfGA, ZPA I 2/1/83, Bl.151.
- (3) Protokoll - Manuskript I, Bl.176.
- (4) 斎藤哲「ヴァイマル共和国時代末期のドイツ共産党とその経営内活動」『明治大学社会科学研究所紀要』36-1 (1997年) 128-130頁。さらに、就業労働者と失業者の間の意識的差異については、星乃治彦「ナチス前夜の労働者達のプロフィール」『社会経済史学』53巻2号 (1987年6月) 79-96頁を参照。
- (5) Protokoll - Manuskript I, Bl.366.
- (6) Protokoll - Manuskript I, Bl.190.
- (7) このブラウンシュヴァイクでの事件については、Berger, P., *Gegen ein braunes Braunschweig, Skizzen zum Widerstand 1925-1945*, Hannover 1980, S.28. Bohn, Willi, Mit John Schehr in Niedersachsen - Braunschweig, *BzG Jg. 19 (1977) - 1*, S.84 を参照。
- (8) Protokoll - Manuskript I, Bl.246.
- (9) Protokoll - Manuskript II, Bl.342.
- (10) Protokoll - Manuskript II, Bl.104.

- (11) Protokoll - Manuskript I, Bl.431.
 (12) Protokoll - Manuskript I, Bl.433.
 (13) Protokoll - Manuskript II, Bl.244,246.
 (14) *Ernst Thälmann, Eine Biographie*, Bd.2, S.567.
 (15) Protokoll - Manuskript II, Bl.45.
 (16) Davids Brief an Thälmann vom 14.3.1932, IfGA, ZPA I6 (Kommunistische Internationale, Exekutivkomitee - Vertretung der KPD, Sekretariat) /10 /84 (Pjatnitzki) Bl.22.
 (17) Thälmanns Brief an Pjatnitzki vom 16.3.1932, IfGA, ZPA I6/10/84 Bl.29
 ノイマンもほぼ一ヶ月後に「テールマンの演説について親友の誰もが、私もレメレも一言もわからなかった」ともらしている。Feststellungen und Tatsachen zu den unwahren Behauptungen in den Reden der Genossen Neumann und Remmele in den Reden vom 10.April 1932, IfGA, ZPA I 6/10/84, Bl.188.
 (18) Protokoll - Manuskript I, Bl.2
 (19) *Ernst Thälmann, Eine Biographie*, Bd.2, S.546.

3. 大統領選挙

KPDはこの大統領選挙のスローガンとして「ヒンデンブルクを選ぶ者はヒトラーを選ぶ！ヒトラーを選ぶ者は戦争を選ぶ！」を採用して選挙に臨んだ。その結果は表のとおりである。

	30.9.14国会選挙	32.3.13.第1回大統領選挙	32.4.10第2回大統領選挙
KPD	4590160(13.1%)	4983341(13.2%)	3706759(10.2%)
ベルリン	408646(33.0%)	371412(29.2%)	314936(26.0%)
ハンブルク	135279(18.0%)	123879(15.2%)	96485(12.4%)
バーデン	112975 (9.6%)	148351(11.6%)	107987 (8.4%)
チューリンゲン	192259(15.2%)	246561(18.1%)	177769(13.5%)
SPD	8575244(24.5%)		
NDSAP	6379672(18.3%)	1139446(30.1%)	13418547(36.8%)

:Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich, Jg.51 (1932), S.546 - 547.

:Statistisches Jahrbuch für das Deutsche Reich, Jg.50 (1931), S.546 - 547.

ここでKPDは、1930年9月国会選挙の時と比べて、バイエルンやバーデン、チューリンゲンや東プロイセンなどの農村部では若干得票を増加させているにもかかわらず、ベルリン、ハンブルク、オーバー・シュレージエン、

ハレ・メルゼブルクなど都市部では減らしている。とくにベルリンでは30年9月の国会選挙と比べても54000票減らし、KPD 指導部にとって「全く不満足な」結果にこの選挙は終わった⁽¹⁾。また、全体としてみてもKPDの得票は30年9月選挙に比してほとんど増えておらず、これはナチス支持票がこの間に82%以上増加しているのと対照的であった。

「大統領選挙の選挙結果はドイツ共産党への非常に深刻な警告である。それが指し示しているのは、資本の攻勢、賠償負担そしてファシストのテロルの下で苦しむ大衆を闘争に引き入れることができなかったことの結果である」⁽²⁾ という危機感はなにもこれを言っているピークだけのものではなかっただろうし、党指導部には「明らかにパニックムードがあった。」⁽³⁾

そうした中で、危険な兆候もみられるようになった。例えば、3月22日付でウルブリヒトは中央委員会書記局に送った手紙の中でも報告されている。そこで、KPD ベルリン地区委員会から地方に派遣された指導員が、3月21日のある地方での会議の様態を伝えているとされるのだが、そこでは党内に「ヒトラー候補に入れようというムードがある」とされているのである⁽⁴⁾。では、なぜ労働者たちがヒトラーを支持しようとしているかについて、レメレの第1回大統領選挙結果の総括では次のように言われている。

「ヒトラーを選べば、明確な階級的決断が下され、そのヒトラー体制を革命的に倒すことで資本主義的階級支配を最終的に終わらせ、ドイツ労働者階級の苦悩に満ちた道を短縮できるだろう、という意見が党内にはある。」⁽⁵⁾

こうしたヒトラーを選べば革命に近くなるといった破局的選択が結構労働者の間、ないしはKPD 党内に広がっていた、と考えられる。そしてそのことは案の定、第2回目大統領選挙の時に現実のものになったのであった。32年4月10日の第2回大統領選挙結果は表の通りである。ここに現われているように、第1回投票に対して第2回投票でヒトラーに投じられた票は、208万票近く増加しており、その増加分は71万票というヒンデンプルクの増加分の3倍近くである。第1回にテールマンに投じられた票のかんりの票が第2回投票ではヒトラーに投じられた可能性が高い。

	第1回目投票 (32年3月13日)	第2回目投票 (32年4月10日)
ヒンデンプルク	18, 651, 497	19, 359, 983 (+708, 486)
ヒトラー	11, 339, 446	13, 418, 547 (+2, 079, 101)
テールマン	4, 983, 341	3, 706, 759 (-1, 276, 582)
デュスターベルク	2, 557, 729	-

実際に第2回投票について、「極秘」にされた KPD 中央委員会メンバー向け党内資料の中でも、次のように言われている。

「第2回目の選挙の際、中央ドイツ地域で党员達は非常に活動が鈍く、平均で5%の党员が活動に積極的に参加しただけであった。経営集会はほとんど開かれなかったし、やっと開かれた経営集会でも、最高で20人の参加をみるだけであった。・・・ヒトラーを選んで、それによって破局が早くくればいいとするムードは、地域指導部や出版物で公然と打破されなかったので、いくつかの地域では KPD 票がヒトラーに流れたのである。・・・意気消沈したムードは、ベルリンの党組織では、党指導部間で意見の相違があると、多かれ少なかれ個々の党员の間で知れ渡ったり、討論されているところできりわけ蔓延している。」⁽⁶⁾

問題はこうした意気消沈したショック状態にとどまらず、次の手紙を書いたベルリンのある党员のように、下部から指導部批判まで登場してきたことである。

「第2回の選挙結果は、私が前から抱いていた危惧が現実のものになっただけではなく、それをはるかに越えて、多くの KPD 支持者が全ての助言を無視していることが示されたのである。・・・つまり、我々の選挙スローガンやそのやり方は空砲を放っていたということである。信じなさい、同志たちよ。このことは私だけの感想なのではなく、多くのほかの同志たちによっていわれていることでもある。もう一度全力をあげて私は言いたい、我々の選挙スローガンは見当はずれである、と！」⁽⁷⁾

さらに第2回目の大統領選挙から立ち直らないまま2週間後の4月24日に KPD はプロイセン、バイエルン、ヴェルテンベルク、アンハルト、ハンブルクといった重要な州議会選挙に臨んだ。結果は表のとおりである。

		前回選挙	32年4月24日
(ハンブルク以外は1928年5月20日)			
プロイセン	KPD	2238261(11.9%)	2819763(12.8%)
	SPD	5466394(29.0%)	4675173(21.2%)
	NSDAP	552659 (2.9%)	8007384(36.3%)
バイエルン	KPD	125842 (3.8%)	259338 (6.6%)
	SPD	802951(24.2%)	603693(15.4%)
	NSDAP	211030 (6.4%)	1270792(32.5%)
ヴェルテンベルク			
	KPD	82525 (7.4%)	116652 (9.4%)
	SPD	267077(23.8%)	206574(16.6%)
	NSDAP	20342 (1.8%)	328320(26.4%)
アンハルト	KPD	14957 (7.5%)	20424 (9.3%)
	SPD	84507(42.5%)	75137(34.3%)
	NSDAP	4117 (2.1%)	89652(40.9%)
ハンブルク 1928年2月19日			
	KPD	114257(16.6%)	119481(16.0%)
	SPD	246685(35.9%)	226242(30.2%)
	NSDAP	14760 (2.2%)	233750(31.2%)

Statistisches 1932 S.544.

Statistisches 1931 S.548 - 549.

この選挙結果を総合すれば、ここでも KPD は漸進しているものの、ハンブルクに特徴的なように、都市部では票を減らしている。従来の特長と見なされてきた都市部を中心とした KPD の停滞は顕著であったと結論付けられよう。ただ、ここまでの KPD 関係史料を見ても、こうした状況の下での党内対立は明確な形で抽出できなかった。そこでキンナーにしても、「一方にエルンスト・テールマンならびに KPD 指導部、他方にハインツ・ノイマン、ヘルマン・レメレ等の間で1931年突如現われた意見の相違は、戦術的で権力政治的本質であった。内容的には多数派の批判はノイマンとレメレの基本的立場に対するものではなく、その『やりすぎ』に対するものであった。KPD の方針は相変わらず拡散的で、矛盾に満ちたままであった」⁽⁸⁾と評価しているが、これが KPD 関係史料だけを見て導き出される結論の限界であ

ろう。この限界は、1990年代初頭に当時のソ連側からドイツ側に返却された一連のコミンテルン関係史料によって突破される。そこで広がってくるのは、いわば、表の対立に対して裏の対立である。つまり、表では一致しているかのように見えるテールマンとノイマンの対立がそこでは繰り広げられることになるのである。

- (1) Entschliessung zum 1. Wahlgang der Reichspräsidentenwahl, Entwurf, IfGA, ZPA I 6 (Kommunistische Internationale, Exekutivkomitee-Vertretung der KPD, Sekretariat) /10/84 (Pjatnitzki) Bl. 64.
- (2) Material zur Reichspräsidentenwahl am 13.3.1932, IfGA, ZPA I 2(ZK der KPD)/3/31, Bl.129
- (3) Feststellungen und Tatsachen zu den unwahren Behauptungen in den Reden der Genossen Neumann und Remmele in den Reden vom 10. April 1932, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl. 190.
- (4) An das Sekretariat des Zentralkomitees, vom 22. März 1932, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.64.
- (5) Entschliessung zum 1. Wahlgang der Reichspräsidentenwahl, Entwurf, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.64.
- (6) Einige Stimmen im Zusammenhang mit dem zweiten Wahlgang zu den Reichspräsidentenwahlen, IfGA, ZPA, I 6 (EKKI, Sekretariat)/3/21 9 (Pieck) Bl.166
- (7) Ein Brief Paul Krügers (Berlin Heidenfeld Str. 22) an ZK der KPD vom 16. 4. 1932, IfGA, ZPA I 2/5/38.
- (8) Kinner, S.196.

4. 裏の党内対立

おそらく当時のテールマンとノイマンの対立について、その有り様を最も端的に伝えているのは、この時コミンテルンの執行委員であったピヤトニツキーのファイルの中に残されている、1932年3月2日づけでピヤトニツキーに宛てられた署名のない次の手紙であろう。

「党の最高指導部（テールマン、ノイマン、レメレ）の状況はきわめて憂慮すべき状況である。真の意味での共同作業はもはやまったく存在しない。こちらで何度かテールマンとノイマンとの協議が行われたが、ノイマンに責任が負わせれ、何ら関係の改善にはつながらなかった。それどころか、ほとんど敵対的立場をお互いがとるようになってきている。テールマンは、ノイマンとレメレが彼の仕事を援助しないどころか、邪魔さえしていると、その

責任を彼らに負わせている。逆にノイマンとレメレが主張しているのは、テールマンが独断先行し、彼がこれからやることについてあらかじめ相談しないので、ノイマンは党から発せられる呼びかけなどについて、党の出版物から情報を得るといふ始末であるということである。テールマンはこの主張に反論している。レメレは政治路線の違いがあると主張している。テールマンはしばしば日和見主義的な提案をするが、それは、彼の取り巻きの助言を受け入れたものである。それに関する協議をテールマンはかわしている。そのことも、テールマンを攻撃しているノイマンをして、テールマンに対する最悪の、個人攻撃という立場をとらせている。

そして、テールマンはその取り巻き（ヒルシュ Hirsch、マイヤー Meyer、ノフケ Noffke、オルブリッシュ Olbrisch 等）の中に第2の書記局のようなものを組織し、これがノイマンとレメレに対して陰謀をめぐらしているのである。中央委員会の書記局は名前だけのものとなり、テールマンもなんら重要視していない。テールマンはこうした主張を正しくないとはねつけている。ノイマンは最高指導部で起こった問題に対するテールマンの責任を弾劾しているのだが、そのやり方たるや、個人的な憎悪を伴ったもので、彼の取り巻きの過ちの責任まで追及しているのである。また、KPDがテールマン党になったとか、テールマンが誇大妄想に陥っているとか、語るようにまでなっているのである。

こうした最高指導部の長く続くべきでない危険な状況は、噂となってすでに外に漏れ始めている。中央機関はこのことをもう知っている。最近の中央委員会総会の席でも、相当に苦勞してやっと対立の表面化が押しとどめられたくらいであった。政治局メンバーにも、全てが伝わっているわけではない。疑いもなく、テールマンによって、2人の同志との個人的交流においても、その他仕事上においても、過ちが犯された。そのことはテールマンも認めていることで、それがまた集団的共同作業を困難にしている。こうした事態は公然たる協議の場合でなくすか、最小限にとどめるべきである。

テールマンは中央委員会政治局のメンバーとこうした状況を生み出した全ての問題についてオープンに話し合うことが許されるかどうか（コミンテルンの一星乃）政治委員会からの承認を得たいと思っている。ノイマンが協議に臨席していたら言うてはならないことが多く、それを鬱陶しいとテールマンは感じている。テールマンは、情報が全て与えられれば、政治局メンバーは全員テールマン側に立つと信じている。

さらにテールマンは、ピヤトニツキー同志とマヌイルスキー同志が KPD

中央委員会政治局メンバー全員に個人的に手紙を送ることを望んでいる。その手紙の中では、党の路線はテールマンと詳しく話し合われるべきで、そして路線遂行にあたってテールマンを支持するよう書かれているのを望んでいる。・・・さらにテールマンが望んでいるのは、政治委員会がノイマンをドイツ以外の国際的活動に従事させることである。そうすれば、レメレは再び共同作業ができるような立場をとるようになるだろうと思っている。今はノイマンとレメレは一緒の立場に立ち、ノイマンの悪影響をレメレは受けている。

私はテールマンの提案を支持し、共同作業ができるような指導部を作り出すことができると信じている。 共産主義者の挨拶をもって」⁽¹⁾

まとめてみよう。テールマンとノイマンの間にはこの期たしかに深刻な対立があって、ほとんど共同作業が困難になるくらいであった。ノイマンの影響力が大きいKPD中央委員会書記局での議論を通さない形で、テールマンは自分の「取り巻き」を形成して、独自方針をとっていた。テールマンはこうした異常事態を打破するためにノイマンの更迭を願っていた、ということになる。とくにここでは「取り巻き」の存在が問題となるが、これについては、「レメレとノイマンは、とりわけ私の取り巻き（それに何人かのハンブルクからつれていった新たな同志に対して）に対する闘争を強化しながら、あらゆる手段をつかって私の評判を落とそうとし、それによって私に対する公然たる闘争を開始しようとしている。」⁽²⁾とテールマン自身「取り巻き」の存在は認めている。

さらに、この取り巻きの存在を認めた3月16日付けでハンブルクからピヤトニツキーへ宛てた同じ手紙の中でテールマンは、「私はスターリン同志の指摘に基づき、私のメンバーをもっとひきつけようとし、政治局の重要な同志たちともはじめて腹を割って話をしたのだが、その際わかったことは、レメレが中央委員会総会以前にすでに話しあっていたということであった。・・・私が選挙闘争で全国を駆け回っていてベルリンにいない時急いで中央委員会会議を開いたので、私はウルブリヒト（レオ・フリークとはしばしば）を除いて、個々の書記局メンバーと突っ込んだ話ができなかった。逆にノイマンたちは時間があって、いろいろな問題について話し合う時間がたくさんあった。・・・私がモスクワからこの前帰ってきた時に、大統領選挙を準備するための材料が一枚も刷られてなく、どこかで軽く見ているか、サボタージュがっているのか、という印象をもった。・・・このことは、すでに金曜日の夜に書記局と政治局で総会で採択されることになっていた決議につ

いて話され、その決議案を書記局のメンバー全員がすでに手にしていたという事実からわかる」⁽³⁾と述べているように、大統領選挙以降とみにテールマンは中央委員会書記局から疎んじられていた。

これに対して、ノイマンの言い分がよく表されているのは、おそらくは大統領選挙後ノイマンの意向で設けられた KPD 国会議員団長トーグラーとの会談の内容であろう。その模様をトーグラーは逐一コミンテルンに報告していた。

「彼（ノイマン—星乃）が明確にしたいと言ったのは、テールマンに反対する行動にはいかなる状況でも干与しないということであった。

1.ノイマンの言葉、『誰も問題にしない。誰もテールマンが外に向かって党の指導者であること、党指導者としての名声を受けることに反対しない。しかし、党指導部は我々全員である。今のような合法活動が許されているような普通の時代ではテールマンでいいと思う。ただ、戦争や非合法時代になってからも我々がテールマンと行動をともにすると思うかね。』

2. ノイマンがすでに表明しているのは、『テールマンの支持者一味』に対する闘争、『追従主義』に反対する闘争、『集団的共同作業』が重要だということである。 . . .

トーグラー『テディ（テールマンの愛称—星乃）は真摯なプロレタリアートだ。』

ノイマン『だったかも知れない。』加えてノイマンは、テールマンが今日では気が狂ってしまっているということ、SPDの指導者にしても忠実なプロレタリアートだったという例をあげた。⁽⁴⁾

ここでは、「一味 (Clique)」という言葉を使うまでに対立はエスカレートしていることがわかる一方、そうした対立にもかかわらずテールマンを一応は党議長としての名誉は尊重しようとしている姿勢が伝わってくる。ただ、合法性が確保された時代という条件をつけてはいて、非合法化の危険が自覚された KPD の中ではテールマンで大丈夫なのか、という危惧の念が広がっていたと考えられる。さらにノイマンは、トーグラーに別の場で、つまりもっと個人的な付き合いの中で心中を吐露している。つまり、2人はレメレやレオ・フリークとも一緒になって、何度かドイツ式ボーリングであるケーゲルをやっていた。中央委員会総会の後の32年2月27日にも再びそうしたケーゲル大会が開かれたが、それが終わっての帰り道、電車の中でテールマンとの対立についてトーグラーがノイマンに質問すると、「ハインツは、指導部の状況を語った。そこではとくに、テールマンが『スター気取り』だと

批判され、ノイマンは『窮地に追いこまれている』ということであった。テールマンは、『おべっか使いの群れ』に囲まれている、とも言った。⁽⁵⁾

このようにテールマンとノイマンの対立は、中央委員会書記局とテールマンの「取り巻き」との対立という組織的なレベルで、テールマンの指導者としての資質に関わる問題を浮上させていたことがわかる。こうした対立は、惨憺たる結果に終わった第1回大統領選挙の後に最終段階を迎えることになる。

- (1) Lieber Gen. Pjatnitzky vom 11.3.1932, IfGA, ZPA I 6(Kommunistische Internationale, Exekutivkomitee - Vertretung der KPD, Sekretariat)/10/84 (Pjatnitzki) Bl.19 - 21. 実は若干歴史を遡ると、少なくとも1931年8月の「赤色人民決定」の時には、テールマンとノイマン間の抜き差しならない不信と対立はすでに確認できる。(拙稿「1931年の『プロイセン赤色人民決定』問題」『西洋史学』第168号(1993年3月)1-15頁。)
- (2) Lieber Gen. Pjatnitzky vom 16.3.1932, IfGA, ZPA I 6/10/84, Bl.29-33
- (3) ibid..
- (4) Gespräch des Genossen Neumann mit dem Genossen Torgler, Feststellungen und Tatsachen zu den unwahren Behauptungen in den Reden der Genossen Neumann und Remmele in den Reden vom 10. April 1932, IfGA ZPA I 6/10/84, Bl.206
- (5) Protokoll über Mitteilungen des Genossen Torgler, IfGA, ZPA I 6/10/84, Bl.79.

5. 「ノイマン・グループの敗北」

テールマンは3月13日の第1回大統領選挙前後からひどい風邪をひいてベルリンに帰れなかったとされているのだが⁽¹⁾、惨憺たる選挙結果を受けて中央委員会での対立が激化することは目に見えていたので、しばらくハンブルクに引きこもっていたとも考えられる。そうしたテールマンに対して、中央委員会書記局の模様を逐一伝える者がいた。ウルブリヒトである。ノイマンにとってはこの獅子身中の虫であるウルブリヒトが、3月10日第1回大統領選後3月25日の手紙でテールマンに伝えた内容は以下のようなものであった。「3月14日の会議で、選挙教訓についての協議がなされた。・・・短い協議の後、ノイマンが総括文の草案を作成することが委託され、それを又協議することになった。協議の過程で、同志ノイマンとレメレによってとりわけ強調されたのは、選挙闘争があまりにも、議会主義的・個人的に行わ

れたということであった。その証拠としてレメレがあげたのは、(共産党本部ある一星乃) カール・リープクネヒト・ハウスあたりの通りでは、『テールマンを選べ』といったスローガンの横断幕しか目にできなかったということであった。・・・この問題を扱う時の私の印象は、『議会主義的・個人的』という批判によって、テールマンに対するグループの政治的攻撃が、手はず通り強まるだろうということであった。・・・さらに私が注目したのは、論文の最後のページに我々が第2回選挙に参加すると述べられているところで、テールマン同志が候補者であるということが全く触れられていないことであった。党議長の名前がもはや触れられないなんて、とんでもない話だ。」⁽²⁾

ここでは大統領選挙の総括を協議する場で、ノイマンの総括文が検討され、そこで、間接的ながらテールマン批判が展開されていたことを窺い知ることができる。これに対してテールマン側はハンブルクから電話でノイマンの総括文のいくつかの点を訂正することを提案したのだが、「テールマン同志の提案を協議する前に、すでに原稿の一部が印刷に回されていた。ノイマン同志が、テールマン同志の提案の趣旨は考慮されていると発言した。それに対してヘッケルト同志は、我々はテールマンによって電話で伝えられた提案を付け加えるべきである、と主張した。・・・だが『印刷を急がなければならぬ』ということで、とりたてて何も決定されずに会議は終わった。(正しくは、喧嘩別れになった。)」⁽³⁾

ここでテールマンが訂正を要求していた新聞記事の書き換えについては、もしテールマンとノイマンの対立を路線対立として見ようとすれば、二人の対立点が明確になる恰好の材料である。ノイマンの総括原文に対して、テールマンが訂正を主張した点で、主要なのは以下の3点である⁽⁴⁾。

① ノイマンの総括原文「大統領選挙結果は、果たしてこの結果が党にとって満足できるものなのか、ないしは、共産党に投じられた500万票は我々が今立たされている客観状況に遅れをとっているのではないか、どうか真摯な検討を求めている。」

・テールマンの訂正文「社会民主主義に対する原則的闘争の強化、『より小さな害悪』のインチキを暴露することの強化、統一戦線政策の大胆な適用があったとしたならば、共産党の得票数は基本的にもっと多くなっていただろう。」

② ノイマン「いくつかの地区で我々の得票が増えたということは、全体得票やいくつかの地区で得票が減少したことを、『大統領選挙では議会選挙に

くらべていつも得票が少なかった』といった単純な説明では説明がつかないということを示している。」

・テールマン「はるかに困難なことは、共産党によってはじめから闘う候補者としてたてたものの、広範な大衆によってはあまり理解されていない候補者に大衆をつなぎとめておくことである。」

③ ノイマン「我々の選挙闘争の主な弱点は、非常に議会主義的・個人的に行われたことと、あまりにも政治的・階級的でなかったことである。」

・テールマン「我々の候補者と『階級対階級』の政策はあまりにも図式的に扱われ、日常政策の具体的問題と十分に結び付けられなかった。」

まずここでの両者の対立は路線上の対立とは呼べるものではない、ということでは明らかである。総じてノイマンの総括文の方が相対的に自己批判色が強いのに対して、テールマンの方は自己弁護的であるといえよう。テールマンが自己批判的になれないのは、もしそうすれば、自分の責任問題が問われてくることになることも考えられたからだろう。両者の案を検討した先の3月14日の書記局会議の経緯を見る限り、テールマンが窮地に追い込まれていることが確認できる。ところが、その後事態は意外な展開を見せ、最終結末へと向かうことになるのであった。

実はこの間にもすでに事態の收拾は模索されていた。調停の場になったのはコミンテルン執行委員会の政治委員会であった。ピークのメモで確認できる限りでは、1931年10月30日から11月1日にかけてモスクワで両者間の意見調整がすでに図られている。その翌日には、KPDの指導者たちはスターリンとクレムリンで話し合いをもっている。1932年1月22日にもテールマンはモスクワで彼の秘書ヒルシュとノイマン、レンメレとの意見の食違いについて話し合わせ、32年2月11日にはピークがモスクワからベルリンに戻りKPDの中央委員たちとこの問題で協議を積み重ねている⁽⁵⁾。だが、こうした協議の具体的内容は定かではないが、結局度重なる調停は不調に終わった。32年3月17日にテールマンの「取り巻き」の一人であるマイヤーは、テールマン宛てに手紙を書いているが、そこでは、モスクワから派遣されていたクッチとの会話の様子が記されている。

「モスクワへの出発の日（32年3月3日）私はクッチ同志にビュロー広場で会った。会話の中で、すぐにいくつかの党内問題を話すようになった。・・・出発前のこの話し合いで、クッチは党内状況について次の3点を確認した。

1. 我々はテールマン同志に対して手をふりかざそうとする者を容赦し

てはならない。なぜならば、テールマン同志が党の真の唯一の指導者だからである。その際クッチが言うには、クッチに対してノイマン同志は、テールマン同志に対してことを起こそうとは、毛頭考えてもない、と言ったとのことであった。

2. 混乱させられた集団活動は再建しなければならない。長いこと引き下がっていたレメレ同志が、再び書記局活動に復帰させなければならない。我々は、彼が卓越した力であるということを知らなければならない。

3. 山師は抹殺されなければならない。この山師にはヴェルナー・ヒルシュも入っている。」⁽⁶⁾

ここでは、すでにテールマン擁護を絶対とする事態收拾の方向は決定されていたと考えられる。さらに、第2回大統領選挙がちょうど行われていた32年4月10日には再びレンメレ、ノイマンとテールマンとの間の意見の相違をうめるためにコミンテルン執行委員会の政治委員会が開かれた⁽⁷⁾。この場でテールマンとノイマン双方の対立点は16項目にわたってあげられた⁽⁸⁾。そこでも確認できるのは、こうした対立が路線問題ではないということである。

むしろ注目されるのは、そのうち9項目の「レメレ同志の活動力について」のところで、レメレが言っていることである。

「以前は、私の仕事は、毎日事務所に行ってそこで仕事をすることにあった。私は、『インテルナツィオナーレ』誌の編集長であって、青年党組織の代表であった。テールマンが不在の時は私が代わりに出席した。あの事件以降、テールマンは私を寄せ付けず、話し掛けもせず、私には何の権限もないかのように扱った。これでは私の仕事は無駄であるように思えた。私に許されたのは、ただ隣の部屋にいて文献の整理をすることだけであった。したがって私は事務所に行くこと自体は少なくなったが、他のあらゆる党の行動には私は参画し、全ての会議にも参加して私の意見を言った。・・・私が排除されてからの私の活動は、テールマン同志の隣の部屋に座っていて、彼が私を呼ぶのをただ待っているだけである。これでは私の活動としてはもったいないと私は思うのである。」⁽⁹⁾

ここで確認できるのは、第1回大統領選挙直後の総括をめぐる書記局でのやりとりとは対照的に、4月10日段階ではレメレは窓際に追い詰められていることがわかる。ただ、ここで転機とされている文中の「あの事件」とは何なのかはここでは明らかではない。また、ノイマンについても、16項目の対立点のうち10項目めの「青年の間の代表としてのノイマン同志の機能」と

ここで、「テールマンは我々から書記局の決議なしに役職をとりあげた。それまでは、私は青年の間での党の代表であった」⁽¹⁰⁾とノイマンが主張しているように、ノイマンはすでに解任されていた。レメレの次のような証言によれば、こうした決定は、書記局の関知しないところで進められたらしい。「書記局の名前で同志たちの役職が取り上げられ、他の同志が配置されているが、その際書記局には何も知らされていないのである。・・・こうした解任と新たな人事配置は、書記局の中で何ら話し合われることなくなされたのであった。」⁽¹¹⁾

さらに、レメレには書記局会議や政治局会議の日程さえ知らされることもなくなっていた。こうした状況は、第一回の大統領選挙後、テールマンの「取り巻き」とノイマン・レメレら書記局多数派の力関係が逆転し、対立が最終段階を迎えていることがわかる。そして5月14日にはふたたび当事者を含めたコミンテルン執行委員会の政治委員会協議がもたれ、17日には最終決定が行なわれた。そこではレメレとノイマンは弾劾の対象となっていた。

A. 同志レメレとノイマンに対する弾劾：

1. 彼らは、テールマン同志の活動に対して、中央委員会政治局ではないところで異議を申し立て、その異議に対する決定を要求したこと。
2. 党の集団指導体制やその権威が次第に失墜していく状況を促進したこと。
3. 彼らはテールマン同志に対する異議をまずもっとEKKIの政治委員会に知らせなかったこと。

B. ノイマン同志に対する弾劾：

1. 彼は、テールマン同志と党の最高指導部の状況についての情報を、政治局以外の様々な同志たちに提供したこと、
2. 彼は、その情報によって、党内分派の形成や党指導部の公然たる破壊の危険性を作り出したこと。

決議：

1. 最近の党最高指導部におけるレメレとノイマン両同志の挙動は、断固として処罰される、というのもその挙動によって最高指導部の破壊の危険性を作り出し、党指導部の行動を麻痺させたからである。
2. ノイマン同志は6ヶ月の期間KPD以外の国際的活動に従事する。
3. レメレ同志は、テールマン同志との緊密に共同して積極的に党の最高指導部の中で活動しなければならない。
4. 最高党指導部の活動の内容と方法に関する意見の相違は、党の書記局や

政治局において決着がつけられる。

5. 書記局は指導部の課題の増大に相応して強化されるべきであり、完全に集団的に活動しなければならない。

6. 政治局は、党の本来の指導機関として、これまで以上にはるかに前面に押し出されなければならない。中央委員会総会がそのための必要な保障を作り出さなければならない。

7. この決議は政治局と中央委員会総会において短い説明とともに口頭で伝えられるべきである。この決議に関して政治局で一致をみないような事態になった時、ないしは、報告・討論が中央委員会総会で党員の圧倒的多数によって要求された時にのみ、これに関する詳細にわたる報告や討論は行われるべきである。」⁽¹²⁾

同時に人事の交代も決定された。それによると、1. ノイマンをドイツでの活動から解任する。2. ヒルシュは地区レベルの活動に入る。3. ビルケンハウアーとマイアーがあらたにテールマンの秘書になる。4. ピークがフリークにかわって秘書の活動をする。5. フローリンはルール地区からモスクワでKPDの代表として活動する。6. ダーレムが組織部部長となる⁽¹³⁾。それらの措置は、「ノイマン・グループ」を党の中枢部から遠ざけ、替わってテールマンの「取り巻き」を重用することであった。

こうした措置を決定した5月17日のモスクワでの協議にはスターリンも同席していたとされる。「スターリンは選択をする際、遅くともヴィットルフ事件以降擁護する義務が生じたテールマンの側にとどまった。スターリンは、若く勤勉で野心をもったノイマンよりもテールマンの方を、ソ連邦以外で最も重要なセクションにあって容易に自分が影響力を行使できる指導者だと見なしていた。」⁽¹⁴⁾とキンナーは評価する。ここでいうヴィットルフ事件とは、相対的安定期にテールマンの親戚がスキャンダルを起こし、テールマンが窮地に陥った時に、スターリンが権威を盾にテールマンを救出したということを示している。たしかに、こうしたモスクワのスタンスを知ってか、テールマンは、32年1月7日のノイマン宛の手紙では、「党とコミンテルンがこのポストに私を据えている限りは、君よりもより大きな責任を担っている」⁽¹⁵⁾と自認するほど自信をもっていった。ノイマンにしてもスターリンの信任は厚く、その程は、1927年12月広東コミューンを組織するためにスターリンがノイマンを派遣した程であったが、テールマンへの信頼がそれに勝っていた。とにかく、指導力を疑問視され窮地に陥っていたテールマンはこうして救出されることになり、テールマンの「取り巻き」を中心とした新指導

部が誕生した。テールマンの『伝記』の記載によると、この時点が「ノイマン派の完全な敗北」⁽¹⁶⁾となる。

- (1) *Ernst Thälmann*, S.556.
- (2) Lieber Ernst, vom 25.3.1932, IfGA, ZPA I 6/10/84, Bl.76-77.
- (3) Feststellungen und Tatsachen zu den unwahren Behauptungen in den Reden der Genossen Neumann und Remmele in den Reden vom 10. April 1932 (Feststellung), IfGA, ZPA I 6/10/84, Bl.191.
- (4) ノイマンの総括文は、Zu denPräsidentschaftswahlen, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.217-224. テールマンの訂正案は、Einige telephonische Durchsage vom Teddy, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.225-227
- (5) IfGA, ZPA NL 36/10 (Nachlaß Pieck) Bl.140.
- (6) An den Genossen Ernst Thälmann, IfGA, ZPA I 6/10/84, Bl.43.
- (7) IfGA, ZPA NL 36/10 Bl.142.
- (8) Feststellungen, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.187. 16項目にわたる対立点とは、
 1. 32年2月19日の中央委員会総会前の書記局会議に関して。2. 中央委員会総会に関して。3. 『インテルナツィオナーレ』誌のテールマン論文について。4. SPDに対するベルリン攻勢について。5. 第1回大統領選挙の教訓に関する3月14日の書記局会議について。6. 同志テールマンとウルブリヒトの協議について。7. ベルリン地区指導部会議の開催に関して。8. 大統領選挙に関する政治局決議関連。9. レメレ同志の活動力について。10. 青年の間の代表としてのノイマン同志の機能。11. シュネラー同志とレンツ同志の取立て。12. 「焦眉の課題」に関する決議について。13. 人事問題の取り扱い。14. 書記局と政治局の定期的開催について。15. 諸団体全国会議。16. 緊急令に関する書記局会議
- (9) Feststellungen, Bl. 192-3
- (10) Feststellungen, Bl.193.
- (11) Feststellungen, Bl.194.
- (12) Beschuldigung gegen die Genossen Remmele und Neumann, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.156-157.
- (13) IfGA, ZPA NL36/10 Bl.143.
- (14) Kinner, S.202.
- (15) Lieber Heinz, vom 8.1.1932, IfGA, ZPA I 6/10/84 Bl.204.
- (16) *Ernst Thälmann*, S. 564-565.

おわりに

ヒトラー政権を間近に控えた1931年秋、KPD内では再び「イデオロギー攻勢」が強調されるようになるが、「ボルシェヴィキ化」でイメージされる

ような一枚岩的構造は結局は達成されていなかった。明確な方針が確立されていたわけでもなかった。そうした状況だったからこそ、党内に強力な指導者を望む声はあったと考えられる。ただこうした声にテールマンは応える人材ではなかった。大統領選挙などでの KPD の停滞はさらにテールマンに対する不信感を募らせることになる。指導力に疑問をもたせるテールマンに対して新興勢力としてノイマンが台頭していた。逆にテールマンは自分の意思を貫こうとして自分の周りを、ハンブルク出身者を中心とした「取り巻き」で囲もうとしていた。こうして、一応はテールマンを頂点とする2系列の指揮系統が登場することになった。一つはノイマンをはじめとする KPD 中央委員会書記局を経由する系列、もう一つは、このルートがテールマンの思い通りに機能しなくなった後でテールマンが独自に自分の「取り巻き」を中心として作った系列の二つである。したがって、テールマンとノイマンは基本的に路線の対立ではなく、指導権をめぐる書記局多数派とテールマンの「取り巻き」との対立であった。1931年から32年春までは両者が並存して機能していたが故に、KPD の党方針が混乱していたとも考えられる。そして事態の収拾は、テールマンがノイマンらを党指導部から排除する形で進められ、コミンテルンやスターリンもテールマンを支持し、KPD の指揮系統は「取り巻き」派に一本化されることになる。32年5月末にはこのプロセスは一応終了したと考えられる。ただ、これで KPD をめぐる問題は解決していない。むしろ、新執行部には、大統領選挙や地方選挙などでの KPD の後退傾向を食い止める具体的成果を期待されることになったのであった。そこで打ち出されるのが、2月総会でも注目を浴びていた自警団運動と統一会議を2本柱とする『反ファッション行動』という新しい方針なのだが、この詳しい検討については稿を改めたい。